

中教審答申における安全科を見据えた保健安全教育

— 幼稚園・小中学校における身体・心・食の健康安全指導の実際 —

荒谷美津子 川崎 裕美 山崎 智子 桑田 一也
池田 明子 佐伯 育伸 高橋 法子 内海 和子
雨宮 恵子
(研究協力者) 大西 李代 高橋 愛夢 吹田 晋

1. はじめに

近年、大規模な自然災害や子どもが被害者となる事件や事故、災害が多発している。また、子どもの健康課題は多様化・深刻化しており、食教育の在り方が問われている。平成20年には学校保健法が学校保健安全法に改正され、学校安全の充実や、危険発生時の対処要領による的確な対応の確保等、国・地方公共団体や学校の責務が明らかにされた。また平成24年には「学校安全の推進に関する計画」も策定された。これまでも、子どもたちをとりまく危険や犯罪、災害から身を守るための教育活動は行われてきたが、特に東日本大震災により、安全教育・心のケアの重要性が着目されている。学校保健安全法や平成24年3月に提言された中教審答申でも学校安全の充実が述べられており、「主体的に行動する態度を育成すること」とされている¹⁾。

また、食品中の放射性物質の問題や、細菌・ウイルスによる食中毒等、食の安全に関する問題が相次いでおり、消費者の食に関する正しい知識、食品選択能力がより求められている。学校においても、平成17年に食育基本法が、平成18年に食育推進基本計画が制定され、子どもたちが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けることができるよう、積極的に食育に取り組んでいくことが重要となっている。

このような現状から、子どもたちが健康で安全な生活を送ることができるよう、正しい知識を持ち、行動化できる判断力・生活力を身につける必要があると考える。そこで本稿では、家庭での保護者の意識と本学校園における最終学年生徒の状況をふまえ、実践について示すことにする。

2. 研究の目的・方法

(1) 研究の目的

昨年度は、中学校第3学年（アンケート実施時は第2学年）の保護者を対象とした「家庭での安全と食の安全に対する調査」を行い、家庭での安全意識・対策について調査を分析して実態を把握した²⁾。

本年度は、昨年度実施した保護者の子どもである中学校第3学年の生徒へ、昨年の保護者アンケートと同様のアンケートを実施し、自分たちの健康管理や身の回りの安全対策をどのように認識しているかを明らかにした。昨年度実施した保護者の調査結果との比較により、家庭教育の実際を踏まえて、学校での幼稚園・小学校・中学校における健康安全教育のあり方を検討することとした。

(2) 実態把握

本年度の調査の対象者は、中学校第3学年の生徒、男子38名(48.1%)、女子40名(50.6%)、未回答1名(1.3%)の計79名の生徒に自記式質問紙調査を実施した。昨年度調査の回答者は、今年度の生徒の保護者にあたる66名である。内訳は、父親6名(9.1%)、母親60名(90.9%)から回答を得た。保護者の年代は30代が8名：父0名・母8名(12.3%)、40代が53名：父5名・母48名(80.5%)、50代が4名：父1名・母3名(6.2%)、未回答1名：父0名・母1名(1.0%)であった。

調査内容は、「対象者の基本情報」「自然災害に関するもの(自然災害に関する危機感や対策等)」「防犯に関するもの(通学路や携帯電話等)」「身のまわりの健

Mitsuko Aratani, Hiromi Kawasaki, Satoko Yamasaki, Kazuya Kuwata, Akiko Ikeda, Yashunobu Saiki, Noriko Takahashi, Kazuko Utsumi, Satoko Amemiya, Riyo Onishi, Ann Takahashi, Susumu Fukita: Safety education in school based on the report of the Central Education Council— The systematic school hygiene safety education connected with body, mind, food and nutrition in a kindergarten, an elementary school, an junior high school —

康・安全に関するもの（感染性の病気や事故・けがの対策等）「食の安全に関するもの（食の安全に対する意識の有無や食品購入時に重視すること、食品購入の頻度等）」等の33項目で、選択回答方式と自由記述回答方式を用いた。ここでは、「事故やけがの発生に関する認識」と「食の安全に対する意識」に関する調査結果を報告することとする。

(3) 中学校第3学年生徒実態調査の結果

① 事故やけがに対する項目

調査項目の中の中学生の事故やけがに対する認識や、家庭教育のなかでの保護者との関係のみてみるとつぎのような回答が得られた。

「事故やけがの発生を防ぐことについて、どのようなことに気をつけていますか（自由記述）」という問いに対して、自由記載してもらったものを8つのカテゴリーに分けて集計した。結果は、「周囲の確認」39名(49.4%)、「交通安全を守る」26名(32.9%)、「落ち着く」8名(10.1%)、「何もしない」8名(10.1%)、「危険行動をとらない」7名(9.9%)、「危険予測をする」5名(6.3%)、「運動をするときは準備体操をする」3名(3.8%)、「祈る」1名(1.3%)であった。(表1)

表1 事故やけがに対する生徒の意識調査

項目	人数(%)
周囲の確認	39名(49.4%)
交通安全を守る	26名(32.9%)
落ち着く	8名(10.1%)
何もしない	8名(10.1%)
危険行動をとらない	7名(9.9%)
危険予測をする	5名(6.3%)
運動をするときは準備体操をする	3名(3.8%)
祈る	1名(1.3%)

「事故やけがの発生を防ぐことについて家族の方と話をしたことがありますか。」という問いには、「はい」45名(57.0%)「いいえ」34名(43.0%)と、半数以上の者が過去に家庭で安全についての話を家族でしている。

また、「事故やけがの発生を防ぐことについて家族の方から言われたことを実践していますか。」という問いについては、「いつもしている」13名(16.5%)、「時々している」34名(43.0%)、「あまりしていない」15名(19.0%)、「していない」15名(19.0%)、「未回答」2名(2.5%)と、6割の生徒は事故やけがの予防について、何らかの意識をして生活している結果となった。

② 食の安全に関する項目

「食の安全について意識していますか」という問い

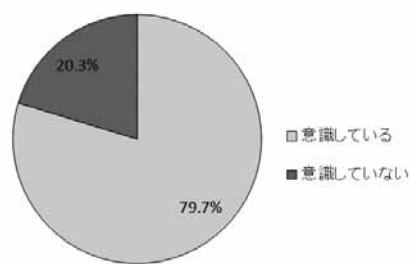


図1 「食の安全意識の有無」について(生徒)

について食の安全に対する意識があると答えた生徒は79.7%(63名)であった(図1)。平成23年に行われた農林中央金庫による第2回子どもの食生活の意識と実態調査によると、首都圏に住む中学3年生の食の安全への関心度において、関心があると答えた生徒は67.2%であり³⁾、我が校の生徒(79.7%)と比較してみると、我が校の生徒は食の安全に対する意識は高いことがわかる。

また、生徒のアンケートによると、「食品購入時に重視していること」については、重視している項目の高いものから、「鮮度」92.4%(73名)、「産地・食品メーカー」70.9%(56名)、「天然素材」68.4%(54名)、「価格」67.1%(53名)であり、最も目につきやすくわかりやすい、「価格」以外の3項目にも注目している生徒が多いと言える(図2)。

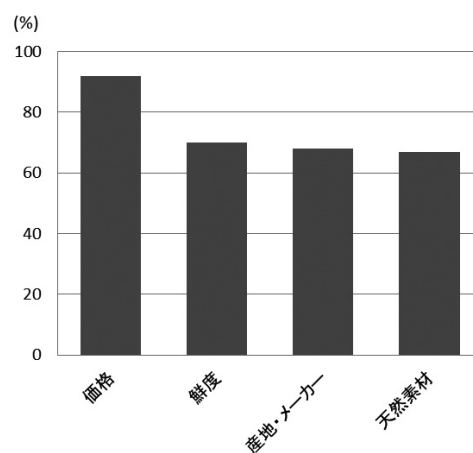


図2 食品購入時に重視していること(生徒)

昨年度の保護者アンケートでの「食品を購入する際に自分の子どもが重視すると思うもの」では、「価格」59%、「鮮度」77%、「産地・メーカー」51%、「天然素材」39%と、鮮度や価格を重要視するのではないかと予測していた(図3)。しかし、図2から分かるように、いずれの項目も生徒たちは保護者の予想よりも数値が上まわっており、それぞれの項目を重視しているという結果になった。特に、「鮮度」、「産地メーカー」、「天然素材」といった食品の品質をみて選ぶ生徒が多いこ

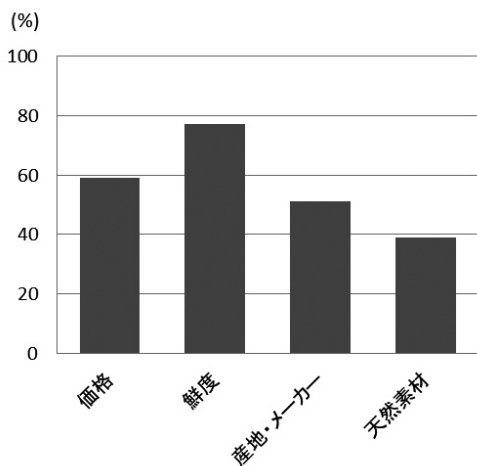


図3 「食品購入時に重視するもの」についての子どもの実態予測（保護者）

とは、食への安全意識が全国平均よりも高いこととあわせ、これまでの食教育の効果が表れているとも考えられる。

また、昨年度の調査結果から、食品の品質に気を配っている保護者の割合は、表2のように「鮮度」97%、「産地・食品メーカー」91%、「天然素材」86%と非常に高く、「価格」39%と非常に低かった。生徒は、「鮮度」92.4%、「産地・食品メーカー」70.9%、「天然素材」68.4%と割合は違うものの、保護者が普段食品購入時に気にかけている順位と生徒が食品購入時に気にかけている項目の順位が同じであったことから、家庭での保護者の呼びかけや普段からの習慣は生徒たちの食品を選択する基準に影響を与えている。価格については、保護者は高いか安いかということより品質を重視して購入しようという意識が高いので価格は重要視していないが、自分の子どもが食品を購入する際には価格は鮮度のつぎに重視する項目であると予測している。生徒の結果は67.1%と数値は高いが、順位的には保護者の実態と変わらないという結果になった。これは、品質も大事であるが、価格も食品購入の条件としては大事な選択要素の一つと認識している生徒が多いことが伺える。

この度の調査から、食の安全意識が高く、食品購入時に重視すべき点も理解している生徒が多いことがわかったが、食の安全意識があっても食品購入時に鮮度や産地・食品メーカー等を重視しない生徒もいるこ

表2 食品購入の際に重視する項目

重視度	保護者	生徒(保護者の予測)	生徒(実際)
高 ↑ ↓ 低	鮮度(97%)	鮮度(77%)	鮮度(92.4%)
	産地・食品メーカー(91%)	価格(59%)	産地・食品メーカー(70.9%)
	天然素材(86%)	産地・食品メーカー(51%)	天然素材(68.4%)
	価格(39%)	天然素材(39%)	価格(67.1%)

と、反対に食に関する安全意識がなくとも食品購入時に鮮度や産地・食品メーカー等を重視している生徒もいることがわかる。

しかし、食品購入時、「価格」以外にも「鮮度」や「産地・食品メーカー」、「天然素材」を重視している生徒は多いが、実際に中学生が購入しているものの多くは飲料・菓子類であり、生鮮食品のように鮮度等を見て購入する機会が少ないことが考えられる。このことから、意識や知識があってもそれを実際の生活に生かすことは少ない状況にあり、学校で学習したことを実際の生活に生かしていくことができるような指導が必要であると考えられる。

3. 指導の実際

幼稚園・小学校・中学校で、「事故やけがの発生に関する認識」と「食の安全に対する意識」について実際に指導した内容を抜粋して記述しておく。

(1) 幼稚園保健指導

①実施学年 年長クラス

②題材名 あんぜん「よーし！」

③ねらい

○事故を防ぐために、危険を予測して生活したり遊んだりすることができるようになる。

④指導内容

○自分たちが遊んでいる写真を提示することで、何が危ないのか、これから先どんなけがや事故が起こりそうか予想できるようにする。

○どうすればけがや事故を防げるのかを考えるように促す。

○事故を防ぐために、周りをよく見て安全を確認して遊ぶことを確認する。

○友だちの安全を気づかって遊ぶことができている姿を紹介し、友だちと相談したり、危ないことに気づいていない人に教えてあげたりしながら遊ぶことに意欲がもてるようにする。

⑤園児の反応

教師が予想した以上に子どもたちは危ない点をたくさん見つけ、どうしたらよいか気づくことができた。



写真1 「危ない！」をみつけよう

例1：マットの“みみ”が出ているから、ひっかかるかも？



「よーし！」みみは折り曲げる。

例2：巧技台につまづいてケガをするかも



「よーし！」もとの場所にもどしてから遊ぶ！

例3：トランポリンと近すぎ！！



「よーし！」広い場所でする



写真2 ケガが治るしくみを学習する子どもたち

⑥指導を終えて

子どもたち同士で「よーし！じゃないよ！！」と声掛け合いながら遊ぶ姿が見られるようになった。また、担任から日常生活の危険な場面で指導した際、子どもたちの中で保健指導とつながり、理解が深まってよいとの意見が寄せられた。

幼児期は何かには夢中になると、危ないことがわかっていても行動と結びつかないことが多いので、繰り返し指導していくことが必要である。

(2) 小学校保健指導

①実施学年 第1学年

②題材名 「わたしたちのからだってすばらしい！」

③ねらい

- けがを治すのは自分の力（自然治癒力）であることを知らせ、自分の身体のすばらしさに気付く。
- 自分でできる簡単な手当の仕方を知り、実践しようというきもちになる。

④指導内容

- けがの写真を見て、自分たちがけがをした時のことを思い出させる。どんな時にけがをする？けがをした時どうしてる？けがをした時、まず何をしたらいいか、体の秘密を勉強しながら気付かせる。
- けがをしても治るのはどうしてかを理解することができるようにする。
- 私たちのからだの力を発揮するためにはどうしたらいいか考えるよう促す。具体的には、「水で洗う」だけでなく、丈夫な体を作るために「早寝早起き」「好き嫌いせずに何でも食べる」や「けがをしない工夫をする」「危ない場所で遊ばない」など、自分たちの生活のしかたにも着目させる。

⑤児童の感想

- バリアくんやガードマンとうんぱんしゃがいて、けがをなおしてくれるんだとおもいました。これから水であらって、バリアくんやガードマンとうんぱんしゃにまかせてみようかなっておもいました。このなおしてくれるじぶんは、すごいなど

おもいました。

- きょういろんなひみつがわかったしバリアくんとかガードマンとうんぱんしゃのことをしてよかったです。ごはんをいっぱいたべたり、早ね早おきをしたり、けがをしないようにきをつけることもだいじだとおもいました。
- こけてけがをしたら、こんなふうバイキンをやっつけてくれるひみつがあるんだ。できるだけけがをしないようにできたらいいな。もっと、ひみつをしりたいな。

⑥指導を終えて

けがをした時の基本の手当を学習することで、自分で何をしなければいけないか考え、習慣化できるようになってきた。（けがをしたら保健室に来る前に水で洗って来るようになった。洗って来ていない子にも、付き添いの子が洗うよう声掛けをしている。）

けがをした時の対応だけでなく、けがをしない生活の仕方（廊下を走らない・危ない場所で遊ばない・靴のかかとを踏まないなど）についても考えさせていくことで、安全な学校生活について行動を定着化させていきたい。

(3) 小学校食育指導

①実施学年 第6学年

②題材名 「おやつを食べ方を考えよう」

③ねらい

- おやつを食べるときにどんなことに気をつけたらよいか考えたり、種類や量を考えながらおやつを選んだりする活動を通して、自分の健康を考えておやつを食べようとする意欲を持つ。

④指導内容

- ジュースやお菓子に含まれる砂糖と油の量を知らせ、1日に必要な量と比べることにより、糖や油の取りすぎは将来生活習慣病を引き起こす原因となることを示す。
- 種類や量に気をつけて実際におやつを選ぶ活動を通して、カルシウムやビタミンなど不足しがちな

栄養を補えるものや1日200kcalを目安にしてエネルギー量を計算しながら選ぶことを理解できるようにする。またその際に、栄養成分表示を見て、何が入っているのか確認をして選ぶことに気付かせる。



写真3 おやつを選んでいる様子

⑤児童の感想

- 栄養成分表示があるものはカロリーやバランスを考えながら選ぶと体によいおやつの量が分かり、健康で丈夫な体にできることが分かりました。おやつだけでなく、食事を作る手伝いのときにもこのことが生かせると思います。
- お菓子の箱やふくろを見てどんなものが入っているか、かくにんして食べるようにしたいです。
- おやつの目安の200キロカロリーを気にしながらおやつを選んだり食べたりしたいと思いました。おにぎりやくだものなどを選んで気をつけて生活をよくしていきたいです。
- 今日でだいたいのカロリーが分かったのでこれからおかしなどを買うときは生かしていきたいです。おかし以外でご飯でも同じように生かしたいと思います。

⑥指導を終えて

おやつは食事と違って子どもたちが自分で選ぶことができるので、実生活に生かしやすく、感想にも意欲的な意見が多く見られた。

課題としては、子どもたちにとって「おやつ」は、お菓子やジュースをイメージしやすく、おやつを選ぶ活動では不足しがちな栄養を補うというところに至らない子どももいた。また、栄養成分表示については時間が足りず、授業の中で軽く触れただけであったので、今後は家庭科との連携を図った指導を行っていきたい。

(4) 中学校保健指導

- ①実施学年 第3学年
- ②題材名 「安全な生活を考えよう」
- ③ねらい

- 身近な食品添加物の存在や問題点に気づき、自分の健康や安全な暮らしについて考える。

④指導内容

- 亜硝酸の含有の実験を通して、身近な食品であるハムに含まれている着色料や発色剤という添加物に着目させ、調理法や食生活の工夫によっては、添加物の摂取量に違いがあることを示す。
- 自分の食生活を見直すことで、健康や安全な生活を送ろうとする意欲をもたせ、具体的な生活改善について考えさせる。

⑤生徒の感想

- ハムの実験で食品添加物は危険だと思いました。それを摂取しない四カ条を習ったので、親にも伝えておくべきだなと思いました。
- お母さんのおつかいに行く時に食品表示を見ながら買い物をする。
- 食品添加物の摂取量を減らすために、まずは今日のお弁当からよく噛んで食べるようにしていきたいと思います。食べ合わせに良い食材もたくさん食べたいと思います。
- 私は食べ物のきれいな見ためが大切だと思うので、やっぱり食品添加物はさけられないけど、よく噛むことや、食べ合わせを考えることはできると思うので気がついたら心がけたい。
- ゆでることで添加物が減ることは知らなかったもので、ぜひやっていこうと思いました。添加物を入れると見た目もいいし、味もよくなると思うけれど、組み合わせたときの危険性や、たくさん食べたときのことかわからないので、食品表示を見て、できるだけひかえるようにしたいです。
- 今まで食品添加物とか、そんなに気にしてなかったけどいろんな物にあるから、買うときは見たりしたい。食べ合わせも大切だからバランスを考えながら食べたい。
- 特に「噛む」ということは今すぐはじめられることなのでよく噛むということをしていきたいと思います。

⑥指導を終えて



写真4 添加物含有実験をしている生徒の様子

生徒にとって、実際の生活に生かせる指導内容を考えたが、その中でも添加物の摂取軽減方法として、「よく噛む」ことは、より生徒の生活に身近なことであり、多くの生徒の実践への意識につながったのではないだろうか。その反面、自分で料理はできるが中学生が日常的に料理を行うことは少ないため、あまり実践への意識には結びつかなかった面もある。すぐに取り組むことができる具体的な方法を生活と結び付けさせ、生徒が自分の生活に生かしていくきっかけとなるように働きかけることを継続し、家庭との連携を丁寧に行うことで、さらに指導効果を高められると考えられた。

3. おわりに

今回の中学生のアンケート調査結果から、事故やけがに対する関心が高い生徒ほど、家庭でも事故やけがに関する会話をよくしており、生徒は保護者から気をつけるように言われたことを日常生活の中で意識して生活していることが伺われた。

食の安全については、保護者・生徒ともに意識が高いが、生徒は意識や知識があってもそれを実際の生活

に生かすことは難しい状況にあり、学校で学習したことを実際の生活に生かしていくことができるよう、幼少期から継続して行うことで行動変容を促すことに繋がると考える。

今後は、子どもたちが主体的に身の回りの危険や状況を判断し、行動できるよう日常の保育教科学習を見据えた取り組みをしていく。そのために子どもたちの発達段階に即した幼少中一貫のモデルプランを開発していきたい。

引用（参考）文献

- 1) 文部科学省：学校安全の推進に関する計画の策定について（答申），2012
- 2) 荒谷美津子，川崎裕美，森脇智子，金岡美幸，桑田一也，福田佳世，高橋法子，井上由子，弓場菜穂子「学校における安全教育—幼小中の体系的学校保健安全教育プログラム作成への課題—」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』第40号，pp.195-200，2011
- 3) 農林中央金庫：第2回子どもの食生活の意識と実態調査，2011